陰陽?列伝

ＢＧＬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
陰陽？列伝

【Ｎコード】
Ｎ８９７１Ｚ

【作者名】
ＢＧＬ

【あらすじ】
異能を持つ少年――――羽村直人。
そのきっかけは、彼が１５歳の時に交通事故に遭い、家族を失うことから始まる。
その日を境に、直人の世界は変貌する。
見えざるものが見え、見えざるものと対峙することを可能とする《見鬼》を双眸に宿す。
そして数年後、物語は始まる。

直人の友人――――綾崎恢梨の些細な日常の変化を始めに、事態が動き出す。
死してなお恢梨の背を守り続けた少女の願い。そして親友の苦境。
動き始めた災厄。

明かされる彼女の秘密。
失った恋心、死してなお想う恋心、報われない恋心、芽生えた恋心
――――その果てにある運命。
運命に翻弄された少年と少女の物語。

プロローグ０　断ち切られた想い

気が付いた瞬間、もうダメだと――――そう思った。
足が縛りついたように、そこから動けない。咄嗟に避けるとか、その思考が頭から根こそぎ奪われたみたい。
横断歩道に突っ込んできた車がすぐそこにあった。
そもそも、そんなことを思考する暇があったかどうか……
グラウンドに引かれたコースを跳ぶように走り抜けていた脚は、この時、私を裏切った。
裏切られた私は……明滅する。
瞬く視界。強い砕けた音はたぶん私の骨の音――――そして浮遊感。
痛みはまだなく……道路に背中から叩きつけられた時も、苦痛はなくて、無理矢理肺から搾り出された吐息が、白い靄となって私の口から漏れ出た。
雨が降っていたのを覚えている。
紅い紅い……深紅色の雨。
ぼたぼた……と降り注ぎ、ざーっと酷い耳鳴りの音。
それが私の血だと気が付いた。曇天が赤いカーテンを引いたみたいに染め上げられていく。
ずんと身体に激痛の波が暴れだす。苦しくて、でも身をよじることすらできない。
私の身体はもう壊れていたから……
苦しいのにもがくこともできない。

生理的に震えるのは、死の痙攣のせい？
濃い絶望が、くっきりとした孤独感と一緒に押し寄せてくる。
「あ……ぐっ……ぁっ……」
声を上げたくても、溢れてきた血が邪魔で言葉すら封じられる。
圧倒的な恐怖。その奈落の黒さと断ち切られる未来の容赦のなさに震える。
涙が溢れる。
視界に大好きな……大好きな人の泣き顔が飛び込んでくる。
「――ッ！　歩■■ッ！　■美ぃ■■ッ！」
あぁ……でも聞こえない。聞こえないよ……もっと大きい声で……言って……
もっと傍で……寒い……身体の奥まで貫く寒さ……

もう何も見えない。カーテンは全部引かれてしまって、耳鳴りが酷い。
五感が消失し、宙に浮く。
嵐のような焦燥。
（これで終わるの！？）
これが運命なの？　私の想いは……これから証明し続けて……ずっと恢梨の傍にいたいのに……っ
やっと幼馴染から卒業して……これからは恋人として二人で生きていくのに……！
もっと、もっと早くに！
もっとずっと一緒に！
もっともっとッ！
突き上げてくる後悔、唐突に断ち切られた私の運命に激しい戸惑いと激怒。
こんなの……こんなの納得できないッッッッッ！！
恢梨の泣き顔が掠れて見える。あぁ……っ。泣かないで、恢梨、恢梨ッ！

その時、私は――――見た。
恢梨の後ろ。人が集まりだした、その囲いの向こうから私を見ている黒いスーツの男を。
周りは集まりだした人の騒音に満ち、叫ぶ恢梨の声すら聞こえないのに、その男の声は不思議と耳に落ちた。

『こんにちは……』

納得も……そんなことは知らないとばかりに、運命は私の……命を……未来を――――全てを奪った……

プロローグ1　夢の終わり

黄昏時に目を覚ました。
当然だ。眠っていれば、絶対にいつか目を覚ます。
だが目を覚ましたくなかった。まだ眠っていたかった。……優しい夢を見ていたかった。
とりわけ今日は。
「歩美……ッ」
見ていた夢で、網膜に鮮烈に焼きついた少女の名前を愛しさとそれと同様の悲哀さをもって呟く。
歩美を忘却しそうになったら――――忘却するといっても、記憶の奥底に封じ込めているだけだが――――歩美の夢を見る。
それは歩美との何週間、または何ヶ月かに一度の夢での逢瀬だ。

目を閉じ、夢の余韻を追いかける。決して現実では追いつけないが、俺は追いかけることを絶対に止めないだろう。
歩美は陸上の短距離の選手だった。
その日は……その日は陸上の短距離の大会で、歩美のストレッチの手伝いをしている時の夢だった。
歩美は明るい子だった。
歩美が笑うだけで日常で起きる様々な煩わしい出来事を忘れることができた。彼女は俺に一番心地良い居場所を提供してくれる女性だった。
今でも目を閉じれば、歩美の姿を――――様々な表情を鮮烈に思い出せる。
たとえ……たとえ、歩美が死んで三年の月日がたったとして

も。
同時に今でも車が人を……歩美を奪った音を覚えている。
歩美は俺の目の前で――――死んだ。
手を伸ばせば……少し駆け寄って、手を伸ばせば抱き締められる距離だった……ッ！
そんな俺の目の前で歩美は交通事故にあった。
俺は歩美を助ける事ができなかった。彼氏面をしながら何も……何もできなかったッ！　そばに――――そばにいながら、何も……。
永遠に縮まらないあの距離！
絶たれた歩美との交流、それは冷たい遮断だ。
あの頃の俺はいくら彼女のためでも自分の命を捨てるなんて、出来るわけはないと思っていた。
だが、今なら言える。
俺の命など、どうでもよかった……どうでもよかったんだ。
歩美が助かるなら……どうでも……

「本当に？」

プロローグ2　悪夢は終わりて現実

その事故は、僕が15歳の時だった。
高速道路での玉突き事故に、家族で乗っていた乗用車が巻き込まれ、大破。
運転席と助手席にいた両親は、正面から衝突した鋼の衝撃に――――食われた。

僕は……僕のみがひしゃげた車体から抜け出すことに成功した。
無我夢中で歪な檻から抜け出す。頭を打ち、割れた額からは流血。視界を遮る血。叩きつけられた衝撃に体が動かない。
車から抜け出した僕は、家族を助けようと四つん這いの姿勢から振り向いたが、動いたが、エンジンに引火し、車体がごうっと猛獣のような唸り声を上げて――――――爆ぜた。
至近距離での爆発に、身体は人形のように翻弄され、路上を転がり、坂になった路面を転がり落ちた。
体を強かに打ちつけ、坂道の上では炎上する火炎の唸りに、残された妹と弟の絶叫が重なる。
助けを呼ぶ声。僕を求める声。苦悶と嗚咽の断末魔。
まだ生きていた妹と弟は、生きながらにして炎に焼かれた。
至近距離で叩きつけられた爆風と事故の衝撃、そして苛む頭痛に昏倒した。

目が覚めるとそこは白い病室で……僕は家族を喪失したことを聞かされた。
正面から衝突した両親は、体を圧死させられ即死。
歪に歪んだ車体に取り残された妹と弟は悲惨だった。絡みついた車体の歪みに身体を縛られ、横転した車は燃え出した。
鋼の車体を少しずつ熱で燃え上がらせ、徐々に妹と弟は、生きながら焼かれて――――死んだ。
僕自身も重傷で、骨折二箇所、左額の傷は五針の裂傷。全身打撲。救急車に運搬された時は出血多量のせいでショック死寸前、心停止にまで至った。
三日三晩、生死の境を彷徨い、重度の意識混濁。四日目の明け方前に目を覚ました。

そして、僕は事件の後遺症で《眼》をやられた。

１５のあの日、僕は家族を喪失し、以来、僕の《眼》には凶が刻まれた。
家族はいない。僕の家族はもうどこにもいない。
残された僕は……この現実に……どうすればいい？
僕も――――僕も共に……連れて行って欲しかった！　僕だけ独り残されてでどうすればいい！？
そんな僕に見舞い客が来た。誰もその存在を知らず、誰にも見えぬ見舞い客。
天涯孤独の僕の両親には、親戚はおろか遠縁のものもいない。
見舞い客は黒い喪服のような着物を着ていた。そして僕に言った。

『こんにちは』と……。

第1章　ALTEREGO　――別の自分――

《綾崎恢梨（あやさきかいり）》

朱ノ宮学園

三階　2年A組

窓側の席

最近俺は憂鬱だ。

いや、いつも変わる事などなく憂鬱だったが、最近は輪をかけて憂鬱だ。

なぜならば……

「ねぇ、綾崎君もこっちに来てみんなと一緒に話さない？」

このクラスメイトが俺に何度も話しかけてくるからだ。

目の前で返事を待っているクラスメイトの名を、織原理央（おりはらりお）。

わざわざ真中の席から、俺の座っている最後席までやってきて、誘ってくる。

おそらくクラス委員長の立場として、このクラスの担任である北野教諭に頼まれて俺を誘っているに違いない。

すなわち、『クラスの中で孤立している生徒がいたら、声をかけてやれ』……たぶんこんなところだろう？　ご苦労な事だ・

内心で薄く笑う。
そんな上辺だけの団結が何だと言うんだ？
俺には一人の親友がいる。友は彼だけで十分だ。
（体裁を整える今の教師にありがちな教育方針だな……）
しかし……
これで何回目だろうか？　鬱陶しさが、話しかけられるごとに蓄積されていく。
（うるさい。邪魔だ。鬱陶しい。話しかけるな）
次々と過激で、攻撃性を含んだ単語がでてくるが、そんなことはおくびにも出さずに無表情を装う。
「別にいい」
何度目になるかわからない同じ単語を同じ抑揚で言う。
だが……気をつけないと俺は織原の誘いに無意識に応じそうになる。
「そっか……うん。じゃあ……また、ね」
あきらかに落胆した様子を見せ、織原は立ち去る。
（またね……だと……？）
織原の言葉を胸で反芻させる。
とんでもないと思った。
ざわめいた感情がそれだけではないと知っていたが、慎重に“それ”から目を背ける。
とにかく、俺は織原が嫌いだ。初めて会った時から。
「……」
違うな。数秒考えてそう思う。
（初めて会った時……俺は嬉しかった……）
もはや読書の意欲が失せていた。
本にしおりを挟むと、窓の外を瞳に映す。
初めて織原にあったのは、去年の入学式の帰宅中のことだ。桜が視界いっぱいに咲き誇っていた時……。
あの事件から二年ほど経った時、織原と偶然目が……合った。

惹きこまれそうだった。ただ呆けたように俺は織原を見た。
久しぶりに、俺は他人に表情を見せたと思う。
押し寄せてくる激情に身を震わす。
声をかけそうになった。
名前を呼びそうになった。
瞳から涙が溢れそうだった。
そして、
なによりも、彼女を抱き締めたかった……！
溢れ出す想いは心臓を甘苦しく急きたてる。
だから、
「あ、あの……」
戸惑う織原の声と表情を認識した瞬間、冷水を浴びたように体が凍った。
（違う……！）
何かを言ってその場を後にした。たぶん謝罪の言葉だろう。

家に帰り、歩美の写真を見た。
歩美と帰宅中に会った少女は似ていた。……いや似ているってもんじゃない。酷似していた。
作っていた表情を投げ捨てているほど……似ていた。表情がそれこそ、人目にでてしまうほど。
「彼女が欲しい……側にいて欲しい……！」
激情のまま言って、俺は激しい動揺に襲われた。
「何を言っている！？　俺は……俺は何を言っている！？」
信じられないことを口にし、俺は慙愧（ざんき）の表情を浮かべる。
歩美以外の誰にも絶対に言わないと思っていたことを……口にした。
俺は恥じた。歩美以外の誰かを一瞬でも惹かれた自分を恥じた。
その日以来、俺は織原を嫌いになった。

遠くから視界に入りそうになると、顔を背けた。見たくはなかった。
とりわけ……顔は……
だが、織原は学校行事などに関係していたため、嫌でも織原を見ることになる。
まるで人の決心を嘲るかのように……

それから一年後。
二年の新しいクラスを見た時、忌々しげに眉を歪める。
同じクラスだった。
あの織原理央と、同じクラス。
一気に俺の憂鬱が増す。最悪だ。
新学期と言う事もあって、少し弾んでいた心も動きを止めてしまう。
加えていつの間にか織原の名前を覚えていた自分に嫌悪した。

そして、憂鬱は現在に至る……と言うわけだ。
ようやく鬱陶しい教室から図書室へと移動する。理由は、俺が図書委員だからだ。
図書委員をやっている理由の一つは親友に誘われたということが大きな原因だ。そしてもう一つは、何らかの委員をやって自分の置き場を作っておいた方が、煩わしい教室から離れる事ができて、都合がいい。最後は図書室の静かな環境は素直に嬉しいものだ。
「フハハハハハ！　本気(マジ)スか？」
聞きなれた哄笑を聞いて、俺は微苦笑をもらす。どうも最後の理由は取消しだな……。
親友の放つ哄笑は、扉を閉めていても僅かな隙間からこれでもかと言うほどの音声をもって、飛び出してくる。

図書室の扉を開けると、すぐに親友が反応して、声をかけてくる。
「いらっしゃい！　って何だアーヤかよ」
親友は図書室の入り口の正面にあるカウンターから、居酒屋のような活気のある声をかけてくる。
それから俺の顔を見てニッと笑う。
威嚇するような、それでいて不思議と親しみのある笑顔だ。
「……そのアーヤと言う呼び名はやめろ」
憮然とした表情を作りつつも、内心は表情ほどではない。
しかし綾崎だから、アーヤと言うのは安直すぎる気がしないでもないが……
親友の名前は、羽村直人（はむらなおと）。中学からの親友だ。
野性味な容姿で十分端正な顔立ち……なのだが、鋭い研ぎ澄まされた刃物のような目つきにざんばらに伸ばした髪。そして強烈な個性。
あげく頭に巻いた白のタオル。それらが、人に妙な威圧感を与えている。
実際、直人は俺よりも４？ほど身長が低いのだが隣に並ぶと、なぜか自分の方が低く感じる。
豪胆で、何がそんなに楽しいのかと言うほど日々を笑って過ごしている……見かけ上は。
そんな……友人だ。
「何だよー、つれねぇーな」
直人は少し不満気な顔を浮かべると、何かやつにとって、良いことを思いついたのか、ニヤリと笑う。
「酷い、恢梨ったら！　あの熱～い、とき☆めきの熱い夜を忘れたの！？」
「……知らんな」
オカマ声でウインクを送る直人を冷たくあしらって、俺は直人の隣へと腰掛ける。
「あ～あ、冷たいな～」

忍び笑いを喉元で鳴らして、直人は椅子へと体重をかけて寄りかかる。
「最近どうよ？」
語尾を高く上げて尋ねるのは、関西特有のイントネーションだ。
いまいち関東出身の俺には馴染みのないものだが……直人に慣らされてしまった。
「別に……無変化だ」
素っ気無い俺の返事に、苦笑を直人は漏らす。
しかしその瞳の奥に潜むのは俺とは別の苦い悲しみだ。
「そっか……まあぼちぼち……な」
「ああ……」
そして、直人は一瞬こちらが声をかけそうなほど苦しげな表情を見せる。
同情なんて、まっぴらだ。
だが、直人だけは……違う。
直人も、俺と歩美のことを知っている一人だ。
当時、歩美が死んだ時、俺の周りの友達は俺に同情の言葉を送ってくれた。
その瞬間、彼らとの友情は終わりだ。同情された上で、成り立つ友情なんて有る訳が無い。
俺には彼らの同情の下に隠れた憐憫が見えてならない……俺は……俺は友とは対等でいたい。どうあってもだ。
かけられた彼らの言葉を、俺は頭の中で反芻させる。

『歩美ちゃんは……残念だったな』
『気を落とすなよ』
『元気、出せよ』
それらの言葉の中で、直人の言葉だけが異質で、そして鮮烈だった。

『殴れよ』
『……？』
一瞬、棒立ちになる俺に、睨みつけるような瞳で直人は続ける。
『俺は自分が幸せになったら、必ずお前と比べちまう。……嫌でもな。俺は自分の汚い部分を知っている』
『なんだよ、優越感か？』
俺は直人に問いかける。
『そうさ……自分の心や思いをコントロールできなくムカつくがな……そんな自分がムカついて嫌なんだよ！　お前を可哀相なやつだって、レッテルを張っちまう自分が嫌なんだよ！　気にくわねーんだ！　だから、殴れ！』
その勝手さに俺はほとんど反射的に言い返す。
『何だ、ようするにお前は自分が苦しいからだろ？　自分勝手なんだよ！』
俺は固めた拳を直人の左頬に叩きつける。
叩きつけたと同時に響く直人の怒声。
『何殴ってんだ、コラッ！』
気が付けば、俺は空を見上げていた。
（何で俺は上を見ているんだ……？）
殴られたと気が付いたのは、地面に腰をつけていると認識した時だ。
せりあがってくる左頬の痛みというより、灼熱感に、俺は怒りが全身を貫くのを感じる。
（殴れとか言っといて何だよ……！）
俺は直人を睨みつける。
直人は俺の視線に平然としながらも、どこか俺を見下すような表情で俺を見据える。
直人は、口の中で出血した血をなれた仕種で、地面へと言葉とともに吐き出す。
『自分が自分のこと考えて、一体何が悪いんだよ？　ああ！？　ど

こが勝手だよ！』
『何……ッ！』
『「何ッ」……じゃねーよ！　気取ってんじゃねーッ！』
『気取っているだと！？』
何を言っているか分からないという表情の俺に、直人はせせら笑う。
『恋人を亡くしてしまった不幸の主人公……ってさ。お前酔っているんじゃないのか？　《可哀相な俺》……とか言って、よッ！』
言い終わるや否や直人の拳が襲ってくる。
強烈な左右の連撃に、足下が揺らぐ。
『お前なんかに何が分かる！？』
俺は再度直人を殴りつける。
直人は俺に殴られ、その反動で後に少し体を引くと、口の端を吊り上げて冷笑し……
『分かる訳ねーだろうがッ！』
苛烈な怒りとともに直人が俺の右頬に拳を叩きつける。
『心で思っているだけで、伝わると思ってんのか、お前は！？　口を閉ざして、誰が話しかけても自分の心に入れないお前の気持ちなんざ、誰にもわかんねーんだよッ！』
さらに俺は左頬を殴られる。
『優越感だぁ？　舐めんじゃねーぞ、ボケ！　俺に言わせりゃ、自分の辛い事をどうして俺ら友（ダチ）に言わない？　独りで辛いなら俺らに吐きだしゃいいだろうが！　何のための友（ダチ）だ？　俺らはただ騒ぐだけの存在か？　それとも何か？　俺らは《そんな自分の一番大切な事は言えません》、てことか？　テメーの方が俺らを、俺を軽く見ているだろうがッ！』
そこからはお互い拳の応酬だ。
俺はやるせない思いを拳とともに、直人に放つ。

小一時間で、俺達は地面に仰向けの状態になる。正確にはならざるえない。
理由は殴り疲れたからだ。
互いの存在を、殴られた痛みと荒らげた呼吸で感じさせられる。
『あ～、くそ……痛って～……ったく、俺様のハンサム☆フェイスがよ～』
ぶつくさと呟きながら、直人はまだ仰向けのまま地面に寝そべっている俺の方にやってくると、
『おらよ』
乱暴な手つきで、右手を差し出してくる。
『……』
なぜか……なぜか素直に俺はその手を取る事が出来た。
拳と一緒に、心の中のわだかまりを全部吐き出せたからかもしれない。
と、
俺は思いのほか強い力で引っ張られ、身体を持ち上げられる。
戸惑う俺に、額同士がぶつかるほどの至近距離で直人の双眸と向かい合う。
眼前で直人は例の威嚇するような笑みを見せ、それこそ憎いくらいに宣言する。
『羽村直人は綾崎恢梨という存在を親友として必要としている……だからこれからも頼む』
『……全く、お前にはやられるな……』
歩美が死んでから……ようやく初めて俺は人と会話し――――――笑った。

「……い……おいアーヤってば！」
「ん……何だ？」

昔を回想していた俺は、直人の声に意識を戻す。
「大丈夫か？」
「ああ、ちょっと考えごとをしていただけだ」
笑みを含んだ直人の問いかけに、そう答える。
「ふ～ん……やっぱりアーヤったら、昨日の熱～い夜の事が忘れられないのねぇ～？」
子供が悪戯をする時によくする笑いを直人は浮かべる。
どうでもいいが、そのおネェ口調は気色が悪すぎる。
（ここは話題を逸らすか……）
そう俺は結論づける。
「そう言えば、最近の居候先ではどうだ……うまくいっているのか？」
「……」
直人は、去年から世話になっている居候先のことを聞かれると、顔から表情が消失する。
別に直人は、居候先の人たちを嫌悪しているわけじゃない。むしろ……その逆だ。
だからこそ、直人は悩むのだろう。
我ながら最悪のことを聞いてしまった。

直人は中学の頃に家族を事故で亡くし、自身も重傷を負った。
それ以来、彼は施設を転々とし、直人が高校1年の頃、とある寺院に引き取られて現在に至る。
その寺院の住職には娘が二人いて、直人には義姉と義妹ができた……そう言うことだ。
一度直人に、直人の義姉妹の事を聞いた時のことだ。
『なぜ、俺を引き取ったか不思議に思った』
蝋（ろう）のように白い表情。淡々と友人は言葉を紡ぐ。
『縁（ゆかり）もなにもない気難しい十代中盤の子供。そこに住む人たちは優

しかった。俺にはその理由がわからなかった。同情や憐憫は吐き気がした。だが、それとは違う』

その時の友の目は凍りつき、されど溶岩の如く煮え滾っていた。

『始めは《家族ごっこ》に吐き気がした。けど、俺が何度拒絶してもあしらっても、あの人は……あの人たちは俺の傍にい続けた……』

独白は続く。静謐に滾る友人の声音は、どこか違う誰かのようで……

『狂犬の俺は何度も彼らの手を噛みついた。それでも彼らは手を差し伸べ続けた。次第に俺は彼らに少しずつ、心を許していった』

ぎしりと噛み締める音が漏れる。

強大な慙愧。溢れ出す嚇怒が、握り締められた拳の震えとなって発露する。

ぞわりと直人の全身に怒りが――――いや、これはそんな生易しいものではない。

憎悪……すでに直人の双眸からは、黒い鬼火が燃えている。

『家族になれる……家族だと思った時……俺は知った。俺の両親を奪い、妹と弟を焼き殺し、俺を――――俺をこんな“目”に遭わせた張本人上月夏彦（こうづきなつひこ）の残された遠縁にあたるのが、彼らだったと言うことをな……ッ』

絶叫は悲鳴のようにも怒号のようにも聞こえた。

『あの優しさが偽りだったわけじゃない』

慟哭のようにも嘲りのようにも聞こえた。

『彼らに罪はない。だが、俺の家族を奪い、俺の運命を狂わせた血族だということが……その事実を割り切れない……憎むべき相手はすでに亡く、この憎悪を俺は一体誰にぶつければいいッ！』

それは、俺の叫びでもあった。

『大切にしたいと思ったものは、奪われていく。まるで神の掌で弄ばれているみたいだ。運命の不条理を感じた』

渦巻く黒い波音が聞こえる。

引き摺り込まれる奈落の感覚。

『俺は神を信じない。神がいれば、この世はもっと慈悲に溢れているはずだ。俺は奪われ、弄ばされ、神から、幸福から捨てられた私生児だ。何も信じられない。信じた先から、まるで掬い上げた水のように……掴んだものは滑り落ちていく。こんな想いを何度も味わせる神を、俺は信じない。もしいるならば、どこかで昼寝でもしているんだろうさ』

黒い銅鑼（どら）を鳴らしながら、運命の手は奪い続ける。大切な人たちを……

歩美の顔が思い浮かんだ。

『誰も頼らない。もう大切なものもいらない。優しい幻想などいりはしない。こんな絶望や裏切られた喪失感を繰り返す世界など……俺には耐え切れない』

『すまない。俺自身……どう言っていいか分からない……』

そう不器用で稚拙な答えを返すと、

『いや……わかっちゃいるんだ。俺がやるべきこと。生き残った俺がしなければならないこと……全部わかっている。ただ――――ただまだ俺はそんなに強くない』

そこで、直人はようやくほんの少しだけ苦味を含まない笑みを見せた。

『未成年（ガキ）の俺らには……この世界は住みにくいよな……全て切り捨てて生きていけない』

最後に呟いた……その一言が印象的だった。

「家のことはいいから……そんなことより、昨日俺が書いた図書委員のレジメ見直し終わったか？」

避けるように直人は本題に入る。

これ以上、直人の家についてつっこむのは得策ではないので、ここで追及を止める。

「ああ。今日の朝、学校で確認した……あれでいいと思う」

そこで自分の鞄を探るが、レジメが見当たらない事に気が付く。
「ん、どうした？」
「……すまない。教室に忘れたようだ」
背中越しから覗き込むようにしている直人に答える。
「取りにいってくる」
「付き合おうか？」
「すぐに戻るからいい。カウンターの方を頼む」
正直、教室までの長い廊下を一人で歩くのは気だるかったが、そんな理由で図書委員の役目を放り出すわけには行かない。
「5時にはお家に戻るのよ～」
直人の軽口に頬を少し弛ませると教室に向かった。
喧騒は朝の激しいものではなく、耳に心地良い騒音だ。
部活動の最中の生徒達の掛け声が俺の耳を掠めてゆく。
陸上部の部員たちが掛け声を上げて走っている姿が見える。
その風を受けて、息を弾ませる彼らを見て、思い出してしまう。

歩美は走るのが好きだった。
細くしなやかな体が躍動し、長い亜麻色の髪をそよがせて、風に祝福されたように走るその姿は、どこか触れざる者のように……神聖なものとして俺の瞳に映った。
背中をいつも追いかけていた。
たまに振り返る顔が、俺が後ろにいるかを確認する。
そうして、歩美は背中を向ける。
なぜ走るのが好きかと、問うたことがある。
『気持ちいいからだよ！』
満面の笑み。何でそんな当たり前のことを聞いているのかなという、不思議そうな目。
『しんどい……だけだ、ろ……』
荒れた息の中で搾り出した答え。

『そうかなぁ……確かに走り始めはそうだけど、だんだん体の端々が熱くなってきて、気が付いたら疲れが消し飛んで、どんどん楽しくなってこない？』
『それ……は、ランナーズ・ハイだ……っ』
全く速度が落ちない。それどころか徐々に加速しだすのは、そういうからくりかと、俺は息を喘がせる。
『へぇー、ランナーズハイかぁ……なるほどなるほど。恢梨は物知りだよね、本当』
汗に濡れた額を拭って、歩美は笑う。
『私はね。きっと鳥みたいに空を飛びたいと思うの。けど、羽根がないから飛べないよね。でも代わりに……』
ポンポン、と短パンからスラリとした脚線美を叩いて、にっと笑う。
『脚があるから。私は地を翔ぶんだよ』
そう言って、朝焼けの中、彼女は空を見上げる。
その眼差しと横顔を……俺は生涯忘れない。その時、共にあったことを忘れない。

回想から時計に視線を滑らすと、４時４０分とあった。
（余裕だな）
５時までの時間の猶予にそう判断する。
教室に着くと、手早く置き忘れたレジメの書かれたプリントを回収する。
教室には既に人気は無く、すぐに図書室に踵を返す。
「ふぅ……」
漏れでたため息は、一人のクラスメイトと顔を会わさずにすんだ安堵だ。
だが、図書室に入室しようとした瞬間、背中から織原に声をかけられた。

最悪の事態に内心で舌打ちを零す。
振り向いた先の、期待を込めたその表情がうっとおしい。
そこにはやはり織原がいた。
待ち伏せしていたのか、それとも偶然か。
（もうどうでもいい）
残忍に、凶暴なくらいにそう思う。
織原にはっきりと見えるように眉をひそめる。
俺の表情に織原は心配そうな……そんな表情を見せるが、できるだけその顔を見ないように、声をかける。
「ちょっと来てくれますか？」
内心の沸騰が、逆に冷静な口調を紡ぐ。
図書室から離れ、めったに人がこない校舎の別棟の端へと向かった。
「えーと……何なの、かな？」
この辺りに来たことがないのか、織原は周辺を見回して、俺に用件を尋ねてきた。
何回も、織原の誘いを断ったというのに……
（軽く言っても無駄ってことか……）
内心の黒い感情を努めて圧殺する。
でないと、それは噴きだしてしまいそうだった…。
「迷惑なんですよ、話しかけられるのは」
あくまで丁寧な言葉使いだが、強い口調で織原に用件を言う。
何を言われたのか全く判らない。ただ呆けたように織原は俺を見ていた。
その瞬間、圧殺できない感情が爆発した。
「迷惑なんだよ、何度も何度もしつこく誘われるのはッ！　俺のことはほっておいてくれ！　だいたい俺が織原さんのグループに入る必要性は全くないだろ？　とりわけ君のグループに入りたくはない

んだ！　意味なくツルんで、ギャアギャア叫んで、笑って……ッ、うっとうしいんだ！　俺に……俺に二度と話しかけるな！」
言い切った後、織原は傍から見てもすっと表情を変えたのが分かった。
嗜虐的な快感を得るかと思えば、胸に来るのは激しい後悔だ。
そして、織原の目尻から涙が零れ落ちるのを見て、締め付けるほど強烈で痛切な罪悪感を覚える。
「ごめ……ごめん……なさ……い」
絞りだすようにそれだけを言うと、織原はその場から走り去る。
「……」
俺は無言で織原の背を見送る。
（声を……かけなければ良かったんだ）
そんな言い訳めいた言葉が思い浮かぶ。
「……」
一体どれくらい無言で、俺は立ち尽くしていただろうか？
虚ろな視線を腕の時計に向けると、５時２３分だった。

第2章　嫌いな理由　1

《綾崎恢梨》

織原が嫌いだ。
いっそ憎んでいると言ってもいい。顔や表情が嫌いだ。
存在そのものを拒絶し、嫌悪……いや、憎悪していると言ってもいい。
何よりも織原の笑顔が嫌いだ。
織原ほど克明（こくめい）に歩美を思い出させる存在は、視界に入れるだけで不快だ。
声は違う。性格も違う。ただ顔だけが、驚くほど歩美と似ている。
そして、不快しか感じるわけがないのに……感じてはいけないのに……わずかに嬉しいと思う自分が、吐き気がするほど嫌悪を覚える。
憂鬱で、死にたい。罪悪で、破壊したい。悲しみから、逃げ出したい。
しかし、それは叶わないだろう。
俺は背負わなければならない。苦しまなければならない。笑うこ

とも、幸せになることも許されていない。
大切な人を守れなかったのだから……

人気のない校舎の別棟から図書室へと移動する。
すでにかなりの時間が過ぎていた。直人との約束は守れなかったようだ……。
早足で図書室へと戻る。人気のない廊下に俺の足跡が響き、なぜかどこまでも続く迷宮を彷彿とさせた。
（いや……）
後ろを振り返る。
夕方を過ぎ、陽光の弱まった廊下には暗闇が忍びやかに押し寄せて来ていた。ひどく暗く。寒い。
「すでに……俺は迷い込んでいるのかもな……とうの昔から、抜け出せない……迷宮に……」
ひどい寒気が俺を襲う。腕に痛みを覚えるほどの寒さを感じた。
全身が引き伸ばされるような奇妙な浮遊感……闇に溶け込むように消えのるかと錯覚した。

数分も歩くと、当然のように図書室に辿り着く。図書室の窓から廊下へともれる光が、俺を少し安堵させた。
「遅ぇーよ！」
図書室の入り口の扉を開くと同時に、直人の怒声が飛び込んできた。
すでに図書室内に生徒や在席していた教師や司書の姿はなく、直人と俺の二人だけのようだ。
乱れた椅子や、放置された本などはすでに片付けられ、本の貸し出しと返却を行うカウンターには、完成されたレジメがファイルを開いた状態で閉じられているのが確認できた。

全て、直人がやったのだろう。大雑把で豪快。粗暴な言動ように見えて、それと対照的に神経質で繊細な性格をしている。そして与えられた仕事は常に完璧に近い形でやり遂げる。

扱いやすいように見えて、その実、ひどく掴(つか)みづらい。

きっとそれは、家族を失ったこと。そして預けられていた施設でのことや今の居候先が深く関係しているのだろう……大抵のことはあけすけに物を言う直人が、このことだけは口を閉ざす。

憎悪で燃えた瞳で、直人はその時の境遇を語ったことが思い出される。

俺が歩美を失った時と、また違う陰惨(いんさん)な感情の嘆き……噎(むせ)び、世界と運命を呪い、自分を蔑み、憎悪で固く鎧うしかなかった時を、直人も俺と同じく経験している……たまに見せる、直人らしくない言動と性格の統合の歪みが、それを俺に教える。

違うのは、過去の呪縛と悔恨に囚われ、前に進めず、後ろを振り返ることしかできない俺と違い、直人は過去に囚われず、彼の名前通り、真っ直ぐ前に進んでいることだろう。

その強さはどこからくるのだろう。

同じ位置にいたはずの友人は、たった数年で遥か先でふてぶてしい笑みを浮かべて俺を待っている。

そう言えば……直人が自分自身のことを「僕」ではなく、「俺」へと変わったのはいつの頃だったか……子供が大人になるように、直人は人よりも早く変貌していった。

「ぼけーっと突っ立ってないで、手伝ったらどーなんだよ？」

直人の少し苛ついた声に我に返る。

「……ああ」

「恢梨……？」

僅かな俺の戸惑いを察したのか、直人は本棚に本を収納していた作業を止めて、俺を探るように見る。

陽気さと少しの傲慢。そして自信に溢れた直人の瞳が、すっと色を失い、怜悧(れいり)な光が代わりに、輝きを灯す。

酷く老成した瞳。
それは重大な秘め事を知っているかのようだ。いつもの陽気な男が見せる、もう一つの冷静な顔。その表情は、まるでいつもの陽気さが演技だと錯覚してしまいそうになる。
いや……事実、演技なのかもしれない……
こいつはよく笑う。機嫌よさそうに応じる。
だが、今のこいつを見たら皆、混乱する。
多重人格とか、そういうふざけた答えではない。こいつは見せない、踏み込ませない。
人付き合いのよい仮面を装い、そうとは知れずに人を寄せ付けないのだ。
俺とは違うやり方と表情で、こいつは誰も彼も拒絶するのだ。
「どうした？」
短いが、直人は核心に迫る問いを俺に投げる。
「別に……何でもない…」
「お前何かあった時、絶対に『別に』って言ってから、視線を逸らすよな……昔から…」
直人から視線を逸らしながら答えた俺に、直人は軽い憤激が生まれるほどの冷静で正確な指摘を送る。
「詮索（せんさく）はウザいか？」
俺を追い詰めるような問いを発しながらも、直人の瞳には痛みを忍ばせている。
それを拒絶できるわけがない。
だが、織原のことを口に出すわけにはいかない。
口にすれば、この親友はおそらくどんなことをしても、織原を俺から排除し、俺を守ろうとするだろう。
馬鹿のように全力で、愚かなくらい感情的に……憧れるくらいに真っ直ぐに……
たとえば直人が困っていれば、俺はそこまでできるだろうか？
（できはしない……）

そんなに俺は善人じゃない。
助けたいと思う。
だが、思うことと、実際にそれを実行できることとは話が別だ。
こいつはするだろう……してくれるだろう。
こいつはどこか壊れている。痛覚の感覚が人より優れすぎている。
こいつは痛いのだ。
自分の大切な人間が傷ついている所を見るのが、痛くて痛くて、その痛みに耐えられないのだ。
だから、平気で自分を犠牲にできる。罪を重ねても平気なのだ。
羽村直人という男の行動理念と状況が一致すれば、こいつは想像を超える爆発力を持って障害を排除するまで止まらない。
故にその前に、止める。
「そんな顔するなよ」
苦渋を滲ました直人の台詞に、俺は無意識に俯いていたらしく、顔を上げて直人を見る。
「……」
沈黙する俺に、直人は軽く息を吐き出し「仕方ねぇな」と呟く。そして例の威嚇するような、実にこいつらしい笑みを浮かべた。
「いつでも話してくれ。俺は待つし、協力する」
苦笑せざるおえない。
俺の嘘と偽りは容易に見抜かれている。
それでも、直人はその嘘に騙されたふりをしてくれた。追求せずにいてくれる。こんな細やかな配慮の出来る人間が粗暴だと？
周りは容易く騙されている。
こいつも、そして俺も孤高の城を築き上げるのだ。
城壁を築き、城門を堅く閉め、誰も彼も入らないようにする。中身のない城を守っている。
「ああ……いつか話す……」
結局、俺はそんなずるい答えしか、直人に返せなかった……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8971z/

陰陽?列伝

2011年12月30日01時54分発行